

高等学校における音声言語の指導はどのようにしたらよいか

—聞き取る力の向上をめざして—

山下 明子

一 はじめに

生徒たちは、おしゃべりが好きである。休み時間や掃除時間など、実に大きな声で、生き生きと語り合っている。ところが、いったん授業が始まると、本を読む声は小さく、発表する声は聞き取れない。その発表も、記号や単語を言うだけで、まとめや説明を求めると「わかりません」の一言が返ってくることが多い。おとなしくはしているが、説明や質問は聞き逃していることが多いし、友人の発言に耳を傾けて、自分の考えとつきあわせてみようとはせず、ただ、教師が結論を出してくれるのを待っているのである。以前はもつと教室に声が響いていたような気がする。古文を一斉に読ませると、隣の教室に気兼ねするくらいであつた。今では「声を出して」と何度も言わなければならぬ。グループの話し合いをさせてもうるさくならない。

小さな声の発言も生かさねばと思うから、ついつい生徒の発言を復唱してしまう。生徒はかろうじて教師に向かっ

て発言し、教師の言葉しか聞かない。生徒が互いに聞き合い、言い合うという場面を作るのはなかなか難しいのが現状である。

これは授業中ばかりではない。ホームルームや週番会、生徒総会などでの話し合いのできない状態には愕然とさせられる。

以前、「話すこと・聞くこと」に関するアンケート調査をしたことがある。その調査で、生徒たちは公的場面での話すこと・聞くことは苦手であり、その指導もほとんど受けていないという実態が確認された。そこで私も、音声言語の指導がよく取り上げられるこの時期に、このことについて学びつつ実践していきたいと考えた。

二 年間計画

指宿高校に転動して三年目になった。ここでは学年を持ち上がったことはなく、今年度は二年生の担当である。

私の個人的なものではあるが、音声言語の指導計画を立ててみた。まず日常の授業を、音声言語に留意して進めるようにし、取り立て指導も組み入れていくようにした。これまで話すことだけに重点を置いていたので、今年度は聞き取る力の向上を図るところから始め、話すこと・話し合うことへ進めようとしたものである。

月	学習内容	主な学習活動
4	自己紹介	自己紹介のアイディアを考え、表現の工夫をする。 原稿を書く。スピーチをする。 スピーチを聞いて質問する。
5	話し合い (山月記) グループ	考えを根拠に基づいてまとめる。 互いの発言を注意して聞き、話し合いを深める。 話し合いの結果をまとめて発表する。
6	聞き取り (弁論大会) (校長講話)	聞くときの態度、メモの取り方などに注意する。 弁論を評価表を持って聞く。 自分の聞き取りをチェックする。 聞き取りテストをする。 「聞くこと」について感想を書く。 聞き方の違いについて話し合う。
7	意見発表	意見文を書く。 何を聞いてもらいたいかを観点として、主題文を作り、相互検討する。 聞き手を意識して発表する。 主題文一覧と評価表を持って聞く。

3	1	12	11	10
研究発表	スピーチ	討論・討議	読書会	詩の朗読
古典の自由研究の発表をする。	新春随想を語る。(引き付ける工夫)	話し合いの種々の仕方を理解する。 説得する話し方を工夫する。 グループでのミニ討論会・パネルディスカッション・ダイアベートなどを体験する。	読書会の仕方を理解する。 読書会をする。	朗読の仕方を工夫し、話し合う。 朗読を発表する。 朗読を聞いての感想を書く。

以下に報告するのは聞き取る力の向上を目指して、一学期に試みた、取り立て指導、聞き取りと意見発表の実践である。学校行事、生徒会活動を利用しながら行った。

三 「聞き取る力の向上をめざして」の学習

対象クラス 文系 二年一組・三組(各三三名)

学習活動 (1) 講演や校長講話を聞き取る。

(2) 意見発表を聞く・意見発表をする。

学習目標 ア 聞く態度・技術を身につける。

イ 話の内容や主題を聞き取る。

ウ 話の展開の仕方や効果的な話し方を聞く。

四 指導の実際

エ 話を受けて考えるために聞く。
オ 人に何を聞かせるかを明確にする。
カ 話の展開の仕方や話し方を工夫する。

指導計画

① 四月 創立記念講演会の聞き取り

- ア メモをとりながら聞かせる。
- イ 印象に残っていることを箇条書にさせる。
- ウ 自分の聞き方を振り返らせる。

② 五月、六月 全校朝礼時校長講話の聞き取り

(校長に講話を聞き取りの教材にしたいと相談したところ、専門が国語ということもあつて快く協力してもらえた。)

- ア 録音をとる。
- イ 生徒には予告せずに聞かせる。

ウ その日の二時間に二の二で、四時間目に二の三で、講話の内容を記録させておく。(二〇分)

③ 七月 聞き取りチェック・聞き取りテストと意見発表の準備

意見発表と聞き取り (三時間)
聞き方・話し方についての話し合い (一時間)

- (1) 校長講話の聞き取り
- ① 一回目(五月)の聞き取りの記録状況

- 一 今朝の校長先生のお話の主旨を書きなさい。
- 二 話にでてきたフランスの思想家は誰でしたか。
- 三 お話の中で印象に残っていることを書きなさい。
(箇条書きでよい。)
- 四 お話に対する質問、もつと聞きたいことなどがあつたら書きなさい。

一 について

「勉強も部活も共に成果を上げるために大切なことは、集中力、はじめ、素直さ、自信である。」という話であったが、「勉強と部活の両立」「集中力」にはだいたい触れている。 未記入(5) 三組のみ

- 二 について
- 「モンテーニュ」 正解 一組(14) 三組(24)
- 三 について

例に挙げられた巨人松井の話が圧倒的であった。

四 について

「モンテーニュ」について(7)
部活に疲れてしまった状態で集中力が出せるのか。(1)
校長先生の読書法や勧める本について(2)

校長先生の経験談などについて(2)

② 2回目(六月)聞き取りの記録状況

今朝のお話で印象に残っていることを書きなさい。

「教えることの成果が上がるためには、生徒が学ぶことへの強い意欲を持っていなければならない。」ということと鳥の卵が孵化するときのこと、「論語」の「憤せずんば啓せず、……」を用いての話であった。

両クラスとも「論語」は難しかったようである。したがって、二つの話の関連がつかめず、話に出てきたことを順不同に羅列しているのが多い。

今回はプリントを作る時間がなく、口頭で指示したのであるが、前回の項目に沿って書いているものがある。

③ 聞き取りチェックと聞き取りテスト

△手順▽

- ① 各自の記録をチェック用紙にはる。(前日まで)
- ② メモを取りながら録音を聞く。(一五分)
- ③ メモを見て、自分の聞き取りを点検し、加筆・訂正する。(一五分)
- ④ 二回目については、聞き取りテストもする。
- ⑤ 残りの時間は、意見発表の準備に当てる。(二〇分)

△一回目チェック後の感想から▽(原文のとおり)

*はじめて最初から最後までしっかり聞いた。(男)

*ほとんど記憶に残らない自分もメモを取るとしっかりと話の主旨がわかってくる。メモを取るといふことに力をい

りたい。(男)

*初めは今、あることから話しはじめて、その途中にいろいろな例をあげていた。なかなかわかりやすい内容だった。例を上げて話すとても興味が湧いてよいと思う。メモを取って聞くといふんなことがわかった。(女)

*最後にもう一度まとめてくれてよかった。いつもは、先生の話をちゃんと聞いていないので、「つまらない」とおもっていたけど集中して聞くと、とても役に立つ話でした。(女)

*組み立てがしっかりしていた。注意して聞いていると、まとめの中にそれまでの話の内容がきちんとくみこまれていた。(女)

△聞き取りテスト▽

六月の講話については、次頁のようなテストを実施した。誤答を数えると、六六名中、問一(6)問二(20)問三(4)問四(23)問七(18)となった。クラスを比較してみると、成績上位者を集めている一組の誤答数は普通クラス三組の三分の一以下になる。成績と聞く力は相関関係にあることを改めて感じさせられた。

問五については生徒の答えを分類し、聞き方についての話し合いの材料にした。

生徒の感想では、メモを取ったことに加えてテストがあるという緊張感があったので、しっかり聞けた、話のつながりがわかったなどが多かったが、「自分の聞き方はまずい」「ポイントのとり方に、ズレがあった」「メモを取りな

聞き取りテスト 一組ナニ番 (上) 有利かい子

在校期れの校長講話の録音を聞いて次の問いに答よ。

問一 今のひな日どのまづどして卵からかえるか。
かえるときはに内側から殻をつついて、意見を示し、それを親鳥が外側からつついて助ける。

問二 このことは教育でいうとどういふことになるか。
生徒が自分の力でも出る気を出して、それを教師が上手に受け止めてあげれば教育は成り立つか、ということ。

問三 このときのひなの卒は校訓の中のどのことばに当たるか。
自主

問四 話の中にある論語の文言を書きとめると次のようになる。空所に後辞から適語を選んで入れよ。

子路曰、	一言	一信	一忠	一
夫子曰、	一言	一信	一忠	一

噴 噴 奮 啓 敬 訂 秘 情 否 発 罰

問五 この話から「教える」ということは「どういふことである」と理解する。勉強しなさいという意見を上手に受け止めて、その助けをするということ。

問六 話一方の特徴として挙げていたことを書き

1. 話題の転換の仕方、転換をするとき前向きにして、わざとやさい、という
2. 例のひな日、動物という理解しやすい例を取り上げていく
3. 話し方の速度も聞かすもいやすもの中にゆくりを効かしている
4. その他、大勢な事は表現を変えて繰り返すように話している。

同時

がらでも理解しづらいところがあつた」などもあつた。聞くことへの意識を高め、メモの取り方を工夫させるなどもっと具体的に指導することが必要であるようだ。また、自分自身が話す側として、よい話し手であるかどうかを振り返ることもなつた。

(2) 校内弁論大会から意見発表へ

本校では、六月に校内弁論大会がある。手順としては、五月の連休期間に全員原稿を書き、学級代表を選考する。さらに学年代表三名を選考し、九名で競うことになる。

授業の一環として、この弁論大会を評価表を持つて聞かせることにした。評価項目は、話の材料、話の主題、論の展開、話し方・態度であり、それに感想・意見を書くものである。

また、代表者以外の原稿には、どういうことを人に聞かせようとしているのかを観点としてのコメントをつけ、返却し、クラスで発表会をすることを予告した。

① 主題文作りと相互検討、原稿修正

一回目の聞き取りチェックの残りの時間で自分の発表の主題文を作つて提出させ、一覽表にまとめた。二回目の聞き取りチェックの残りの時間で、四人のグループを作らせ、次の点について、話し合いをさせた。

- A 主題文がきちんと整っているか。
- I 主題文と作文の内容が合っているか。
- ウ 聞く場合の評価の観点をどうするか。

三組ではこの作業がなかなか進まない。その原因はまず、

私の許えたいこと 二年三組

番号	主題文(私は、 とと思う。)	題名	評 価
1	主文(私は、 とと思う。)		
2	...		
3	...		
4	...		
5	...		
6	...		
7	...		
8	...		
9	...		
10	...		
11	...		
12	...		
13	...		
14	...		
15	...		
16	...		
17	...		
18	...		
19	...		
20	...		
21	...		
22	...		
23	...		
24	...		
25	...		
26	...		
27	...		
28	...		
29	...		
30	...		
31	...		
32	...		
33	...		

私の主張

番号	主題文(私は、 とと思う。)	題名	評 価
1	...		
2	...		
3	...		
4	...		
5	...		
6	...		
7	...		
8	...		
9	...		
10	...		
11	...		
12	...		
13	...		
14	...		
15	...		
16	...		
17	...		
18	...		
19	...		
20	...		
21	...		
22	...		
23	...		
24	...		
25	...		
26	...		
27	...		
28	...		
29	...		
30	...		
31	...		
32	...		
33	...		

二年一組 (13) 河内望

自分の意見がはっきり意識されていないこと、主題文というところが理解できていないところにあるようだ。グループの間を駆け回るようにして「この原稿で訴えよう」としていることはなに？」と問いかけながら主題文を検討していく。一つの助詞から考えが深まっていくところもある。「本人がいいと思っているのだから、何も変える必要はない。」「これで友達みんな分かってくれるのに、分からないのは先生だけだ。」という生徒もいる。自分の文章やことばと向き合わせることは難しい。

②意見発表(三時間)

△手順▽

ア 発表は録音しておく。

イ 主題文一覧表と聞き取りメモ用紙を持って聞く。

ウ 評価は生徒の話し合った観点からとし、一組はA B

Cで、三組は一〇点満点の点数でとする。

エ 五人済むごとに質問や感想を言うようにする。

オ 自己評価をし、他の発表の中から二つ選んでその感想を書く。

△話し手の様子▽

三組から始まった。男子はまだ原稿が整っていない生徒がいたので女子から始めた。声があまりに小さいのに驚いてしまった。かろうじて聞こえても原稿の棒読みである。

五人ごとの質問や感想が出せる状態ではなかった。清掃時間にテープを流した。掃除をしながら結構関心を示している。「原稿も手直しして、いい話をしているのだから、みんな

なに聞いてもらわなくてはもったいないね。」と励ます。次時は少しだけ声が出るようになっていた。男子はいくらか声は大きいですが、説得力には程遠い。

一組は男子から始めた。三組での指導不足の反省に立って、具体的に声の出し方や間のとり方、原稿用紙の置き方などについて説明した。演劇部員もいて、うまく話してくれたので、声や話し方に気をつけてはいるようだ。女子も後まで聞こえる程度の声は出している。

△聞き手の様子▽

静かに聞いている。聞こえなくてもじっとしているし、評価もしている。この聞き方の姿が他者を意識していない話し方につながっているのであろう。それでも、二時間目になると聞こえないことに不満がでるようになった。

△生徒の自己評価・感想から▽

ア 話し手として

人前で話すことの経験がほとんどなかったため、恥ずかしく、緊張した。声が出ているかも心配だった。声は出していたつもりなのに聞こえなかったと言われた。原稿の棒読みだった。実際に自分で話してみても、話の流れがうまくいっていないと感じた。主題文と話の内容が少しずれていて、この次は、もっと上手に話したい。こんな経験もたまにはいい。大切なことだと思った。

イ 聞き手として

いいことを言う人が多いと思った。学ぶところが多かった。声の小さい人のが惜しかった。聞き手に訴えるところ

自己評価	3組 26番 (東 麻衣子)
主題	家族みんなを見やり 明い家庭をつくることは大切だ。
流れの話し	発表している時に「おまじと見て、原稿どおりに読みながら所かありました、読み直しが足りなかったと思う。」
話し方	自分では声は大き出したつもりです。発表は「下ばかりむきだを訴えるように」と言われた。何回も話を少しづつ「負えな」といけな」と思え。
恐れ	私、みんなの前で発表するのはとても苦しいです。でも、もうま自分の言いたいことが書けて、みんなの前で話そうか、どうか心配す。でも、まぎの慣れよう、これから日記をつづうか、思っています。

発表の中から二つを選んで、感想を語りよう。	
(25) 主題 (小) 親切	送り主 (東 麻衣子)
野太い、みんなの弁論を聞いて、納得をしました。若い人、先輩の席をゆする。これはとても大切だと思えます。最近私は、勇気を出せないものです。これからそういう場面に合った時、勇気を出して、「どうぞ」とやさしく言ってみようと思っています。	

(引) 発表へ信用されていますか。	送り主 (東 麻衣子)
信用されていますか」といざなり問われ、胸がどまどしました。人に信用されることはとても大切だと思えます。最近私はよく人の約束を守れないような気がします。人に信頼される人になりたい。と、思っています。	

があまりなかった。

△話し合いから▽

聞き取りと意見発表の一つの区切りとして、自分たちの聞き方・話し方に何か変化があったかどうか、六〜五人のグループで話し合いをさせた。「全く変化なし」も一グループずつあったが、次のようにまとめてきた。

ア 聞き方について

自分から聞こうと思わないといけないうことがわかった。主題や内容を意識して聞くようになった。自分の意見と比べて聞くようになった。自分が話すとき、聞いてもらえないといやだから、みんなのをなるべく真剣に聞こうとするようになった。

イ 話し方について

声の大きさに気をつけるようになった。相手に聞こえるように話そうとするようになった。語尾まではつきりいおうとするようになった。言いたいことを短文でまとめるようになった。発表の時、日常の「くだけど」とか「やっぱり」とかいう言葉を言わないようになった。

五 反省と課題

(1) 教材の問題

講演、講話、意見発表が、聞く力を育てる教材として、適切であるかどうかは偶然的要素が強い。今回、校長講話においては、校長に協力を依頼し、テーマや構成がはつき

りした教材となったが、意見発表においては、意見文の書き方や話し方の指導が徹底されないままのものであったので、聞き取る力を育てるというより、話し方を評価するために聞く、ということになってしまった。ただ、全員が話し手と聞き手を体験して、相手に聞いてもらえるように話さねばならないということは実感したようである。

どのような聞く力を育てるのかを明確にし、それにふさわしい教材が不断に用意されなければならないだろう。

(2) 指導方法の問題

聞くことにおいては、聞くこうとする意識や雰囲気作りが一番の問題であり、この点はまだ踏み込めてはいない。

今回はとにかくメモを取りながら聞くことを習慣づけたと考えた。そして、生徒たちの周囲にあるいろいろな聞く場面で、その場に適した聞き取りができるようにしていきたい。一回目の聞き取りでは聞き取りの観点を示したが、二回目は何も指示できなかったところ、数名の生徒が前回の観点に沿ってメモしていたのなどは、講話の聞き方への意識がいくらか出てきたものと思われる。また「講演・講話を聞き取る」学習から「人に聞かせる」ということに関心を持たせることができた。「意見発表」では、聞き手になり、また話し手になることによって、自己の話し方を振り返らせることになった。これらの体験を、話すこと・話し合うことへつないでいくために、聞くこと・話すことの具体的指導法の研究・実践を積み重ねなければならない。

一組で演劇部の生徒の発表はモデルとして効果があった。昨年度の二年生には、読書会をする前に、大村はま先生の読書会をプリントして読ませたところが活発になった。

話すことや話し合いの経験は少ないのでいいモデルを示すことも大切だ。また、途中から「声を大きく」といつてもなかなか声は大きくならないが「出だしの一語をはっきり」と言うと、結構声が出るのである。このことは野地潤家先生が、藤原与一先生のお話として教えてくださったのを実行したのだが、ちょっとした指示の仕方が変わるのであると実感した。

(3) 評価の問題

音声表現はその場で消えてしまうものであるだけに、場をとらえての指導・評価が適切になされなければならない。また、事後指導のあり方も研究し、生徒が、自己の聞く力、話す力の伸長を確認できるものとしての評価をしたいものである。

一方、聞く力、話す力を総合的国語学力の評価にどう位置付けていけばよいのかを考えさせられることも多い。もちろん、各テストにおいて、間接的には評価されているわけであるし、平常点の中に入れることもできる。しかし、時間をかけて取り扱っても点数化されないため、生徒の中には本気で取り組もうとしない者もあり、教師も「受験学力」養成に不安を覚えるため足並みがそろわない。

この問題は国語科だけに留まらない大きなものであるが、

「新しい学力観」ということが言われる今、従来の評価の仕方に留まっては何も新しくなっていないような気がする。

大学入試が変わらない限りどうにもならないと、我々自身よく言うのだが、具体的に検討し始めなければならぬのではないだろうか。

(4) 時間確保と連携の問題

平常の授業の中で音声言語を意識して進めようとする進度が遅れ、取り立て指導は時間確保が難しい。聞くこと話すことの力をつけることは避けて通れないことなので、三年間を見通した上での年間計画によってなされなければならぬだろう。そのためには、国語科全員での取り組みが必要である。ばらばらにやっただとしても学年が変わり、教師が変わればまたやり直しということになりかねない。

音声言語ということは国語科だけに限られるものではないので、学校全体で連携を取ることができたらいいと思う。例えば、ほかの教科でスピーチや発表があるなら、その実施の前に国語でスピーチの仕方を学習する。ときには、校長講話の聞き取りテストを全学級で行うとか、弁論大会の評価表を全員に持たせるとか、生徒総会の前に、会議の仕方のモデルを示すとか、学校行事に関連させて全校一斉に指導することなどが考えられる。話し合いの指導ということで職員研修を持つなどはどうであろうか。このようなことを少しずつ提案していこうと考えているところである。

六 おわりに

生徒との毎日の中で、話すことや聞くことに関してもどかしい思いをすることが多い。自分の思いや意見を堂々と言わせたいし、他の人のことばもしっかり聞かせたい。話し合いも生き生きとさせたい。そんな思いから何かしなければと試み始めたことである。まだ、すべて中途半端の状態である。生徒のことばの力は話しことばはもちろん、書きことばも、主題文や感想の文に表れているように不十分である。ことばの力をどのように伸ばしていくか、研究も積み、国語科の連携も図りつつ、方策をたてていきたい。

二学期になって、詩の授業で群読を取り入れた。上手にできたとは言えないが、声にだして味わうことの楽しみのようなものを感じとってくれた。学期末考査の後、討議・討論に入っている。自分の意見はよくまとめて発表するようになったが、互いの意見をかみあわせていくのはこれからだ。つい先日、漢文を一斉に読ませているとき、私がふと読むのをやめたところ、生徒たちの声が教室に響いているのを感じた。

生徒たちは「人は人、自分は自分」と妙に悟り澄ましたところがある。しかし、あの意見発表では、また妙に興奮していた。生徒の自己表現への欲求、人とながりたい思いをうまく引き出して、個として自立した、二十一世紀の話し手、聞き手を育てたいものだ。

(鹿児島県立指宿高等学校)